

イーストエンドにおけるトインビーホールの地域的貢献に関する 一考察「子供の田舎休暇基金」への注目

生田 典子
Noriko IKUTA

要旨

イギリスは世界で初めて福祉国家建設を行った国である。有名な社会改良家であったウィリアム・ベヴァリッジ (William Beveridge, 1879 - 1963) は「福祉国家建設の父」と呼ばれ、労働党首相であったクレメント・アトリー (Clement Attlee, 1883 - 1967) が福祉国家建設を行った。これらのことは、福祉国家建設期に関する研究は多方面から行われている。

本論文では、その「福祉国家建設」につながる素地がイーストエンドにおけるボランティア活動にあるのではないかと考え、従来の研究の中で存在は認知されていたものの、その活動の具体的内容や意義についてはほとんど看過されてきたトインビーホールに注目し、トインビーホールがどのようにイーストエンドへの貢献を果たしてきたかを考察する。

1. はじめに

イギリスにおける福祉の発展の道のりは、中世的相互扶助にまで遡る。16世紀に端を発する救貧法関連諸法を経て、産業革命の時代を迎えると、貧富の格差は拡大し、19世紀には救貧法が大きく改正され、20世紀に救貧法は国家による貧民の救済という役割を終える。最終的にベヴァリッジの著す「社会保険と関連サービス (通称ベヴァリッジレポート)」による計画や、アトリーによる社会主義政策の施行という具体的に形に結実していく。

ただし、これは単線的に歴史的事実を追った理解にすぎない。救貧法は、貧民の救済・福祉の向上というためよりもむしろ、貧民の管理・治安維持のために始められたものであったし、1834年の救貧法改革は、自助の原則に基づいた「道徳」の遂行を求める抑圧的な救済であったと言える。

1980年代には福祉国家の起源は救貧法であるという、救貧法を出発点に、福祉国家を帰着点に置く進歩史観的な福祉国家観が見受けられたが、近年の研究においては、救貧法運営に関して、公的な救済を施した救貧行政は、民間慈善団体によるチャリティなしには運営することができず、チャリティによる私的救貧が大きな役割を果たしていたことを、金澤周作氏が公的救貧と私的救貧の支出額を比較することによって明らかにしている。また、高田実氏は、従来の福祉国家観に対し、「福祉の複合体」論を提示し、救貧法やチャリティなど様々な要因が複

いくたのりこ：地歴公民科教諭

キーワード：19世紀ロンドン、トインビーホール、サミュエル＝バーネット、イーストエンド、社会改良運動

合体を形成し福祉国家につながったとしている。さらに、高田実氏は、救貧法による公的救貧や民間慈善団体によるチャリティなどの救済手段は、救済を与える側が受け取る側へと一方的に与えられていたわけではなく、受け取る側が自らの必要に応じて救済を選び取り利用していたことを、エゴ・ドキュメントに注目し、明らかにした。

福祉国家を研究するうえでのアプローチの中で、やはりベヴァリッジレポートやウェッブ夫妻の思想など、直接的に福祉国家建設に携わった人物に関する研究が目立つように思われる。しかし、人々が国民の福祉に関心を向け始めたのは、必ずしもベヴァリッジレポート以後ではない。

19-20世紀転換期の社会における諸変化については、厚生経済学の登場や、工場法・教育法の改正などが挙げられるが、宮本洋子氏は、研究の中でオックスフォード・ケンブリッジの両大学で行われた大学改革に注目し、大学改革を経て登場した若い大学人たちが取り組んだセツルメント運動のイーストエンドにおける活動意義を明らかにしている。

当時のイギリスの大学、中でも特に上記の両大学は、神学者・国教会聖職者を養成する機関としての伝統に凝り固まっていた。その伝統は16世紀から続いており、中世以来の運営形態が維持されてきた。その結果、大学運営の硬直化や、門戸の閉鎖性、学問や教育の沈滞化を招いた。その状況への批判が19世紀初めに起こるが、中でも注目すべきは1836年のロンドン大学の設立である。ロンドン大学は、非国教徒を中心に、両大学に排除された若者を、社会に必要とされる人材に育てる教育機関として設立され、社会に役に立つために大学という姿を体現していた。

このような背景から、オックスフォード・ケンブリッジでの大学改革運動が始まった。1850年代から1870年代にかけて制定・修正を繰り返された大学法により、大学組織の再編や、カレッジの既得権の廃止、宗教的制約の排除が行われ、風通しの良い大学で、有能な人物が教鞭をとり、新しい学問分野の開拓や教育体制の整備が行われた。両大学は、既存の地方試験の組織に、地方講座開設のシステムを併せ持たせ、地方都市においても大学講座が樹上できる「大学拡張講座」を開設した。ケンブリッジが先んじて地方都市に進出し、オックスフォードは大学教育の需要が少ない町や地域への進出を余儀なくされたが、後者は様々な要求に対応した教育を供給するだけでなく、教育に対する需要を刺激することを掲げ、様々なコースを設け、奨学金を整備するなどした。これにより、1885年から1908年までに577の拠点で32,146講座が開講され、受講者はのべ424,500人にもなった。本論文で注目するトインビーホールは、最初の「大学セツルメント」として、大学の知識人たちがイーストエンドに住み込み、社会改良の視点から教養を広めていく拠点となった。

しかし、宮本の研究は「大学セツルメント」としてのトインビーホールの姿のみに注目しており、トインビーホールが行っていたその他の多種多様な活動にはほとんど言及されていない。しかし、これらの活動に注目することにより、トインビーホールが大学教育を貧しい人びとに授けただけでなく、トインビーホールとその活動家たちがイーストエンドの人々の生活に

大きな刺激を与えていたことが明らかになると思われる。本論文では、トインビーホール創設者のサミュエル＝バーネット（Samuel Barnett, 1844-1913）の問題意識を明らかにし、イーストエンドにおける社会改良にトインビーホールが、住民の教養の向上に貢献したことを述べていきたい。

2. 「イーストエンド」の姿、貧困観の転換

上記までに、イーストエンドという表記を用いてきたが、これは貧しいイーストロンドンを表象し、豊かなウェストエンドと対比されて使われる言葉である。イーストエンドは、賃金労働者の流入による人口上昇を背景に、いつしか貧困・病気・犯罪の巣窟であるというイメージが形成され、右に載せた写真の大きな消火栓、オールドゲートポンプがある通りを挟み、チャールズ・ブース（Charles Booth, 1840-1916）のいう「恐ろしい絵が描かれたカーテン」がかかっており、シティ以西の人々にとってはわざわざ足を踏み入れることのない世界であった。その姿は、小説家やジャーナリストたちによって伝えられ、人々は「哀れなイーストエンド」への施しをチャリティの形をとって行っていた。しかし、それはあくまで執筆者たちの主観や取材対象の選別が反映していると言わざるをえず、あくまでイーストエンドの「イメージ」の形成に留まった。



写真1 オールドゲートポンプ、
イーストエンドへの入口

しかし、貧困観の転換が1880年代に起こる。その役割の一端を担ったのは、1883年に出版された『見捨てられたロンドンの悲痛な叫び（*Bitter Cry of Outcast London*）』である。これは、イーストロンドンを実地調査し、初めてイーストロンドンの貧困状態を具体的な数字と描写で浮き彫りにし、悪徳（evil）や罪（sin）の原因を住民たちの人格や性質のみに求めることはできず、住居の過密状態が悪徳を引き起こしていることを訴えた。これは当初匿名で出版されたが、それは著者が教区牧師としての立場を非公開にすることで、教会人としての立場から貧困問題を語る他の出版物と一線を画し、宗教的価値観や階級による立場を排した言及とすることが目的であった。この出版物は実地調査に基づき、当初の宗教的偏見にとらわれない情報という観点から、画期的なものであり、同時代の公刊史料での言及もされている。これは、「哀れなイーストエンド」のイメージが現実にすぐ隣で起こっている社会問題であると人々が認識し始めた大きなきっかけとなった。

また、イーストロンドンの貧困状態の本格的に調査した社会調査家であるブースは、ロンドンに住む人々を生活状況に応じて階級分けし、その階級に応じた貧困地図を作製した。その結

果、[地図]ⁱⁱⁱで該当地域を見てみると、イーストエンドとよばれるイーストロンドンの地域は黒や青の色が目立ち、統計的に貧しい人びとが集結する地域であることがわかる。プースにより、客観的な視点から、貧困に関する問題が可視化された。

このように、人々の貧困という社会問題に対するまなざしが増えたもう一つの要因として、アーノルド・トインビー（Arnold Toynbee, 1852-1883）の社会貧の概念とトインビーの活動が挙げられる。トインビーはオックスフォード大学ベイリオルカレッジ出身の社会改良家であり、政治経済学者である。「産業革命」という用語を正統な歴史概念として創始した人物として名高い。トインビーは、貧困が自助の欠落による個人に原因があるという、従来から持たれてきた個人貧の考え方を否定し、新しく貧困が社会的構造から生み出されるという社会貧の考えを提唱した。トインビーは、経済思想において貧困観の転換の一助となっただけでなく、『悲痛な叫び』によって具現化した社会問題としての貧困を解決する道筋を示した。オックスフォードでのジョウエットやT.H.グリーンの基で経済思想、社会改良主義を学び、イーストエンドでの実際の住込みの活動により貧困問題の実態把握と、問題の改善を目指したが、生来の病弱な体はそれを支えきれず、1883年に志半ばでトインビーは夭逝した。そのトインビーの志を具現化したのが、トインビーホール初代館長となるサミュエル・バーネットであった。

3. トインビーホールからイーストエンドへ

トインビーホールは、1884年に設立され、現在も同じ場所で活動を続けている。地下鉄のオールドゲート・イースト駅から徒歩数分といったところの、ホワイトチャペル地区、コマーシャル・ストリート28番にある、時計塔が印象的なレンガ造りの建物である。その創設直後の様子をタイムズ紙は以下のように伝える^{iv}。

「主要道路であるコマーシャル・ストリートを外れた細い道に入り、訪問者の眼には背の低いきれいな建物に囲まれた、優雅に整えられた植木とベンチのある中庭がはいてくる。これがトインビーホールである。そしてその場所に満ちている学問的な、まわりと切り離されているような雰囲気は外のこみあう大通りのまわりの騒音や喧噪と対照的なものであった。このホールは講義室（Lecture-Room）、美術室（Drawing Room）、図書館（Library）、食堂（Dining Room）、レジデント用の小部屋からなっており、どの部屋も芸術的・上品に家具がすえられていた。小部屋は大学人、たとえば故アーノルド・トインビー氏、オックスフォードのベイリオルカレッジで政治経済の講師であった、に從った人々によって借りられており、彼らはここに住み込んだ。そして彼らは教え、個人的な交流をし、生徒たちの中で知識を広めたり洗練したりするためにできることをした。」

立地とそこに住み込みで活動する利点を1885年の年次報告書では、過密状態にある都市生活において実際に起きている事実を直面できること、社会問題のなかでの実践的な経験を通

じ、その人々の生活の教養的水準や物質的状况を向上させるよう努力することができることが挙げられている。また、トインビーホール建設の場所としては、バーネットが既に一教区牧師として活動を行っていたことも要因として大きい。

バーネットは「貧しい人々に必要なのはテーブルからこぼれ落ちるパン屑ではなく食卓の席である^v。」とし、慈善活動を行う者は、貧困に起因する問題をじかに観察し、体験するために、その活動が行われる地域に住むことが必要であると述べ、オックスフォード・ケンブリッジの教養ある若者とともに、イーストエンドに住み込み活動を行った。その住込みの活動家をレジデントと呼ぶ。その際にバーネットが追求したものは、「階級間の仲良し」ではなく、文化的欠落を満たせるほどに教養ある都市の紳士たちによって率いられた、貧困地域の住民に関する問題に取り組む、都市内部におけるコミュニティを作ることであり、まさにそれは知識人たちの貧困地域への「植民（セツルメント）」であった^{vi}。トインビーホールの活動方針としては、隣人として貧しい人びとと友人となり、「一対一（one by one）」の「顔を合わせた（face to face）」の関係を重視し^{vii}、信頼関係を築いた上で活動を実践した。トインビーホールの活動が対象としたのは、老若男女を問わない労働者であった。それらの対象のそれぞれのための活動が行われていたため、活動・事業の種類は非常に多種多様であった。

4. バーネットの問題意識と具体的事業—「子供の田舎休暇基金」

トインビーホールの活動家たちは、貧しい人びとと同じ目線に立ち、彼らの抱える問題を解決しようと図ったが、その先頭に立って活動していたのが、バーネットであった。タイムズ紙へのバーネットの寄稿記事を分析してみると、バーネットがイーストエンドの貧困について、子供に関する問題と住宅に関する問題に特に関心を寄せていたことが推察される^{viii}。

トインビーホールは、宮本の研究により明らかにされている大学公開講座をイーストエンドの貧しい人びとの間に分け入って行った「大学セツルメント」で会ったことは間違いない。しかし、本論文では、トインビーホールの具体的事業として、バーネットの抱えていた子供に関する、そして住宅問題に関する問題意識がトインビーホールの事業として結実した「子供の田舎休暇基金」を取り上げ、トインビーホールの性質が「大学セツルメント」に留まらない、地域に根差したレベルでの貢献をしていたことを明らかにしたい。

1) 基金の設立

1890年代のイーストエンドの子供たちの状況としては、工場法と教育法の整備が進み、すべての親がその子女に初等教育を受けさせる義務を負うこととなった。しかし、その子供たちの生活環境は、衛生的に劣悪なものであり、青白い顔の不健康な少年少女が小汚い路地で遊び、働く状況であった。そこで、バーネットは自身の病氣療養中の経験から、自分たちが経験した田舎の新鮮な空気や人々の親切さを、ロンドンの貧しい不健康な子供たちが経験することは、自分たちがそうすることよりも必要であると考え、子供が田舎で休暇を過ごせるよう取り

計らう活動が1877年に始められることとなった。

最初に田舎に送り出した子供は、バーネットの個人的なつてを経て行われ、9人のみであった。しかし、1884年のトインビーホール創設に伴い、その活動は「子供の田舎休暇基金」として結実する。基金の活動の目的は、ロンドンの子供たちが夏の間2～3週間田舎で過ごし、喜び・健康・考え・人生の喜びを与えることができるようにすることであった。活動の大まかな流れとしては、貧しく病弱な子供を集め、基金の委員による選考を経た田舎の協力者（Cottager, Villager）のもとへ、主に鉄道を交通手段として送り届け、2週間の田舎生活を送らせ、再びロンドンまで連れて帰るというものである。

その子供の選び方は、まず、ボランティアの訪問員（Visitor）が小学校を訪問し子供を選ぶ。その後、当該児童の親を訪問、賛同を得て、田舎に送り出す。先ほど確認したように、活動開始時にはすでに、義務教育が制度上は整備されており、さらに学校理事（School Manager）の制度が整っていた。トインビーホールのレジデント・協力者たちのなかにも学校理事の地位にあるものが多くおり、体系的・効率的な子供の募集ができたといえる。子供を選ぶ基準は、思考錯誤がなされ、最終的には青白い・病弱な子供たち（Pale face, Ailing Children）が選ばれ、信条や出身地域などの出自は関係なく、もっとも必要と訪問員たちが判断した子供たちが集められた。

子供が活動に参加するための費用は、基本的に基金から支出され、基金は田舎で子供の世話にあたる協力者に、預かる子供1人につき、1週5シリングを支払い、さらにその他にロンドンから田舎までの交通費がかかるため、子供1人が休暇に参加するのに少なくとも10シリングが必要となる。タイムズ紙の記事を見てみると、寄付はバーネットがタイムズ紙、編集長への手紙の欄に現状を報告し、寄付を呼び掛けて集めたもの以外にも、チャリティコンサートや、博愛活動に関心を寄せた故人による遺贈、名士からの寄付などの方法^xが取られた。

田舎の子どもたちは農家や牧畜の仕事を経験し、広々とした牧草地や海辺、丘陵で太陽の光のもとで遊び、ホストが本の読み聞かせを経験し、田舎のきれいな空気の中で2週間を過ごした。十分な食事をとり、模範的な家族生活に触れることで、身体面で健康的になって帰ってくるだけでなく、田舎での活動の中で新しい知識を身につけ、新しいことへの興味や思いやりの心を持つようになると期待された。

2) 基金の運営

「子供の田舎休暇基金」は主にトインビーホールのレジデントにより運営され、初代議長には館長であるバーネットがついた。基金は寄付によって運営されており、1880年から、バーネットの亡くなる前年の1912年までの間に86件の記事がタイムズ紙に投稿され、活動の報告とともに寄付やボランティアの呼びかけも行われていた。

活動開始時は、活動の拠点はトインビーホールのみで、活動はイーストロンドンの子供たちを想定して行われていたが、次第にロンドン各地区に委員を設け拠点の支部を作り、それぞれ

の担当する地区で参加を呼び掛ける子供を選ぶようになった。その支部の数は1885年に14^{xi}、1887年に32^{xii}、1893年に47^{xiii}、1897年に50^{xiv}と増加していき、活動家の数も着実に増やし、活動範囲はイーストロンドンに限らず、ロンドンへと広げられていった。

田舎休暇の活動を行う際には、いわゆるチャリティの不健全運営の防止を図らねばならなかった。活動をロンドン全域に拡大させていく試みは、バーネットのロンドン中の子供たちを田舎休暇に送り出したいという熱意も後押しし、後に述べるほどの実績を挙げた。しかし、活動を拡大する際に、新しく拠点を構える地域と同様のチャリティ運営団体が存在していた場合、選ぶ子供の審査が十分行われていなければ、多少の経済的余裕のある家庭の子供が複数回の参加をする機会が発生し、基金の、より多くの貧しい子供たちに田舎での楽しみや喜びを与えるという活動目標が達成できなくなる可能性もあった。一定数の子供たちを送り出せる人数枠を十分に機能させることができないということが起こりえる状況にあったのである。

そこで、基金は他団体との連携・調整を行うことで、より有効に活動を運営しようとした。協力団体としては、例えば、「子供に新鮮な空気を届けるミッション (Children's Fresh Air Mission)」が挙げられる。活動内容は基金とほぼ同様で、活動場所はホルボーン (Holborn) などに存在する貧しい地域である。ホルボーンは旧城壁内の、テムズ川北岸のロンドンの中でも中心部に位置する地区であり、全体としては裕福な地域であるが、ブースが作成した地図によると、ホルボーンにも特定の一区画はブースの貧困地図では黒く塗りつぶされており、ミッションが行っていた活動のニーズがあったものであるというのもうなずける。ミッションが対象としたのは、ホルボーン、クラーケンウェル (Clerkenwell)、セイント・ルークス (St. Luke's) などの地区であった。規模は年間3000人の子供を田舎に送り出す程度のもので、募る寄付額は子供一人のために10シリングであるなど、これもトインビーホールの活動基金と同様であった。

必要となる活動への協力者としては、a.学校を訪問し活動を呼び掛ける子供及び親との接点を作る者、b.田舎休暇の間ホストを務める田舎の居住者、c.活動の様子を視察しに行く視察官などの役割が挙げられ、c.については、トインビーホールの基金の委員が務めた。またa.とb.については、子供たちの状況を地域に根差した視点で熟知している人物が選ばれた。

a.に選ばれた人々は、基金の活動報告の会合で実践から浮かび上がってきた課題を検討した。基金の支部の委員たちは、基金の限られた枠数のうち、どの子どもを田舎に送り出すかの優先順位を決める際に慎重になる必要があり、トインビーホールでしばしば集まり、情報交換を行ったり、審査基準を話し合ったりするための会議の場を設けた。1890年12月4日に行われた会合では、実践から浮かび上がってきた成果と課題を複数の活動家のスピーチを通じ確認している^{xv}。まず、成果としては、1889年の実績で、他の複数団体が12,000人を田舎に送り出した一方で、基金は20,000人を送り出すことができたこと、また、チャリティの未統合による弊害が改善されたことが確認され、より一層の弊害の除去が目指されることとなった。そして、課題については、活動規模の拡大に伴う問題、衛生上の問題、一団体の人数についての問

題について、それぞれ活動家が報告し、問題改善のための方策が述べられた。

その中で、ミセス・オリバーは、活動規模の拡大に伴う問題として、未だ送り出されるべき子供が送り出されていない現状を指摘し、トインビーホールの方針としては、一対一、対面での人間関係の形成を重視し、個人の同情心のある仕事が望まれているが、人数が増えたことでそれが業務的になっていないか確認すべきだという旨の講演を行った。また、田舎で健康を得るだけでなく、そこでの経験が子供の知性を高め、それが彼らの親の新しい可能性、新しい責任感にも影響することも期待できるとも考えられた。

さらに、ミセス・パイロンは子供の衛生状況について、子供が田舎で病気になって帰ってくる場合はごくまれであるが、その逆として、ロンドンから田舎に病気を持ち込むことに対しても気を払わねばならなかったと述べている。確かに青白く、病弱な子供と田舎に送る計画であるが、ジフテリアやその他の感染症を田舎のホストの家に持ち込み、その家族の子供にうつしてしまうケースがあったため、訪問員による観察だけでなく、各地区にいる看護師との連携が有効であることが提示された。

子供たちは小学校から集められるため、真っ先に思い浮かぶ協力者たるべき職業は教師であるが、彼らが知っているのは出席状況と試験の成績程度であり、子供たちの家の状況までを把握しているわけではなかった。地区看護師 (district nurses) は、該当地域の知識にもたけており、病気治療の経験や、貧民の習慣も理解しており、協力するにうってつけの存在であった。基金は看護師たちに事前の健康診断を依頼し、活動の出発前日にもう一度、感染症にかかっていないか、看護師の指示を守ってきたかを確認することで、田舎で元気に活動することができ、かつ病気を持ち込まずに済むようになった。

また、訪問員が注目すべきことは子供たちの健康状態だけでなく、彼らの家の衛生状況や家族構成などまで把握したうえで看護師の指示をおおぐべきとされた。家は過密状態にあるのか否か、清潔な服を着ているのかなどが注目すべき点であったが、必要に応じ看護師は、子供の体を洗い、髪を切るなどの指示をし、清潔な状態で田舎に送ることができるようにした。また、協力すべき医師には、医療的知識や資格だけでなく、上記のような地域に根差した知識もまた要求した。さらに、衛生監視員を設け、ロンドン内の衛生状況だけでなく、田舎での飲み水や住居の状況に関しても調査を行うこととした。

さらにハウエル・ブラウン氏は教師と衛生監視員の連携が十分取れていないことを指摘した。そのうえで、田舎のホストの家庭に送る子供の人数について、大人数での活動の実施が好ましくないと報告した。田舎を訪問する側が大人数で送られることのデメリットとして、移動や宿泊上の困難に加え、田舎のコミュニティになじむことができないことを指摘している。大人数での集団は、田舎に行ってもロンドンの遊びをし、ロンドンのことを話してばかりで、村々のコミュニティになじむことができない。また、受け入れ側としても、ひとつの家庭に多くの子供をおいても、家族の中に溶け込むことは難しいため、預かる子供が多いほど収入を多く得られるからといって多くの子供を置くわけにはいかず、せいぜい1~2人を預けるにとど

めるべきであった。そして、少人数に制限することのメリットとしては、田舎への訪問者に対して、ホストが個人的同情心をもつことができること、よりよい監督を行うことができ、ホストにできる最良のやり方で、健康的に子供を預かることができることが挙げられた。

b.の役割を担うこととなる田舎のホストの人選について、1896年のタイムズ紙の記事^{xvi}では、12年間行ってきた活動のまとめとして、活動の方針を明確化している。それによると、田舎の協力者として求められる基本的な要素としては、ホストは、どのケースも受け入れる子供のケアに責任を確実に持つことのできる人物であることが必要である。さらに、子供を過密状態や衛生的に悪い状態におかぬよう視察委員が活動中に見回することも規定されている。また、他の記事を確認してみると、子供たちと過ごすことに対し喜びを見出すことのできる人で、かつ、健全な家族生活の模範 (examples of healthy family life) を提供できる人物^{xvii}、清潔と健康に注意を払い、子供たちとともに快適さと楽しみのうちにありながら、子供たちを監督できる人物^{xviii}が求められていることが分かる。つまり、基金は、報酬のために多くの子供を預かるようとするような人物ではなく、責任感を持ち、自らの生活を健康的に営む、人間味のある道徳的な人物を求め、候補者の中から選んでいたことが分かる。

「子供の田舎休暇基金」がどの程度の実績を挙げていたのかについて、送り出した子供の数、メディアやその他の場での紹介・評価、活動を行う側と参加者の反応などから明らかにしてゆきたい。

まず、送り出した子供の数を、タイムズ紙、伝記をもとに年ごとに示すと、【資料】^{xix}のようになる。トインビーホール設立以前まではロンドン中の小学生のうち、活動に参加できた人数は1%にも満たなかったものが、トインビーホール設立以後は一挙に、人数としては5000人を超え、割合としては8%にまで増加した。グラフを見てみると、1884年から1894年まで急激な人数及び割合の伸長が見られ、その後も緩やかにはなるが数字は右肩上がりの傾向を見せている。これらの数字の伸長の要因としては、児童数の母体自体が増加していること、活動範囲がイーストエンドからロンドン全体に拡大し、拠点が増加したことで、トインビーホールによって組織的・体系的に子供を募集できたことなどがあげられると考える。バーネットが亡くなる直前にはロンドン中の子供たちの過半数が田舎休暇への参加を果たし、バーネットのロンドン中の子供たちを田舎に送り出したいという熱意は、半ばまで達成することができたと思えることができる。と考える。

5. 活動へのまなざし

この「子供の田舎休暇基金」を、人々はどのように見ていたのか、その上でどのように行動していたのかを探ってゆきたい。まず、トインビーホールのレジデント・協力者や支援者などの基金に携わったのはどのような人々であったのかを確認したい。

活動の主体となったのは、トインビーホールのレジデントたちであり、初期のメンバーの中には、1885年から1895年までレジデントであったというベテランのシリル・ジャクソン

(Cyril Jackson) や、後にレジデントとなり、トインビーホールでのキャリアの後に歴史家として有名になるR.H.トウニー (Richard Henry Tawny 1880-1962) など、幅広い年代の者が集められた^{xx}。活動には様々な立場から賛同する人々が現れ、基金の会合では、トインビーホール内部の者だけでなく、高貴な人々や著名な人々が参加したり講演者や議長を務めたりした。その中には王族や、『シャーロック・ホームズ』シリーズの作者として名高いコナン・ドイル、国会議員や大学教授の名前も多くみられ^{xxi}、様々な立場の人々を迎える、かなり開放的な組織であったことがうかがえる。

また、先述のように、基金は様々なところからの寄付から成り立っていたことがタイムズ紙の記事からわかるが、それらの記事はトインビーホールの直接の関係者ではない人物も多く執筆しており、例えば自由党下院議員のオースティン・チェンバレン (Austen Chamberlain, 1863-1937) は「子供の田舎休暇基金以上に自信をもって推薦できる基金はない」と評価している。それらのことから、「子供の田舎休暇基金」は幅広い階層の人々に認知され、寄付を受けていたこと、また、その基金が何を示しており、どのような活動をしているかを少なくともタイムズ紙読者は理解できるほどに、活動はタイムズ紙の読者に認知されていたということが言える。

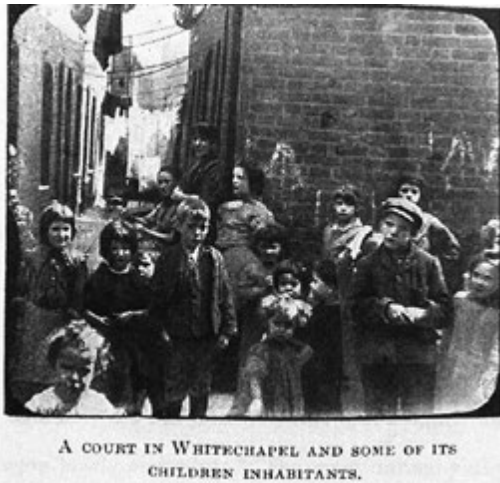


写真2 イーストエンドの路地裏と子供たち^{xxii}



写真3 田舎休暇中の子供たち^{xxiii}

活動には賞賛・賛同の声が多いものの、批判も一部には見られたことが、活動主催側の人物であるヘザービッグが1896年にタイムズ紙に寄稿した記事^{xxiv}からわかる。彼女の記事はモバリー (General Moberly) という人物への反論の形をとっており、内容をまとめると以下のようになる。

モバリー氏は、子供を田舎に送る期間について、14日間も必要はなく、田舎の食う地を吸わせるためだけならば1日でも構わず、交通費も莫大なものになるとし、金銭面で基金は大変

な無駄をしていると主張する。さらに、基金はその慈善行為を行うことで、子供の金を利用して利他主義の満足感にふけており、子供を田舎で墮落させるだけだと、痛烈な批判を行った。

それに対しヘザービッグは自らのボランティアの経験をもとに、活動の内容が、バーネットによって率いられており子供を墮落させるようなものではないことを反論し、さらに、ランバート師 (Rev. Brooke Lambert) による、「単なる快樂 (A mere pleasure)」と「喜ばしい美しい日 (a glad beautiful day)」という比較を引用し、金持ちの子供の香水や使うことのないおもちゃなどの派手なもの、貧しい子供たちが一年に一度、家族・近隣住人とカーニバルを楽しむことを比べた際、前者が当然のように認められる傍らで、後者は非難されるべきではなく、田舎での子どもたちの経験が単なる甘やかしや墮落につながるものではないと反論している。また、子供時代の喜びの経験のための支出は、儉約の知恵の導入で帳尻が合うとし、金銭的な無駄遣いではないことも述べている。

この記事で見られたように、中には子供を甘やかし墮落させるという批判も見受けられたが、「子供の田舎休暇基金」に関する新聞上での反応の大半は、好意的なものであった。

次に、参加した子供たちや、その親の反応や影響を見てゆきたい。子供たちの反応については、家に帰った子供がトインビーホールに宛てて書いた手紙を通じて確認できる。バーネットは、タイムズ紙への投稿記事の中で、子供たちから寄せられる手紙の特徴としては、もらった食べ物のことよりも田舎の景色や友人たちから感じた親切さのことのほうが多く見受けられると述べている^{xxv}。1914年には6745人の子供たちが手紙を書いたと記録されており^{xxvi}、それらの手紙からの引用によると、まず子供たちは活動を楽しみ、日焼けして、活動前と比べれば健康的になって帰ってきたことが伺える^{xxvii}。農場でのびのびと生きる牛や羊を間近に見て触れ合い、初めて家畜からミルクや肉が取られることを知り、昆虫たちを見て感動を得た様子が手紙には描かれ、また、田舎ならではの生活習慣や、景色や遊びを子供の感性を活かして大いに楽しみ、ホストにたくさんの愛情を注がれた活動の終わりを寂しく感じたようだ。これらの子供たちの言葉からは、基金による田舎休暇の活動は概して子供たちには好感をもって受け入れられていたと言えよう。子供たちの日常生活とは違う環境で過ごせたこと、また、そこから多くの気づきを得られたことが読み取れる。

また、参加した子供たちの親の反応についてみてゆきたい。子供たちの親は、活動により子供が得られる利点について理解するにつれて、子供が活動に参加するための貯金をするようになったとバーネットはいう^{xxviii}。その結果、最初期は活動費のほとんどが外部からの寄付で賄われていたが、1883年には親による寄付が81ポンド集まり、1887年には1972ポンド^{xxix}、1900年には8100ポンド^{xxx}集まるようになった。親の中には、貧しさのために2~3シリングしか寄付できない親も、まったく寄付できない親もいたが、活動への認知や信頼が深まるにつれて、親たちが、自分の子供の福祉のために投資を行う意識を持ち始めたこと、貯金を行う計

画性を持ち始めたことがみられる。

「子供の田舎休暇基金」は、無駄なことを嫌い、効率を重視する側面からの批判はあったものの、バーネットが亡くなるころにはロンドン中の子供たちの過半数を2週間の田舎休暇に送り出すことに成功し、親たちの意識にも、子供の福祉への関心、貯蓄の計画性の向上という面で影響をもたらした。バーネットの子供に関する問題意識に対する活動としては、子供たちの健康面・教育面で効果があり、また、貧しい人びとの生活改善のための、彼ら自身の意識の変化につながる一助となったと考えられる。この活動は、バーネットが聖ユダヤ教会牧師として以前から行っていたものをトインビーホールの活動として継承・発展させた活動であり、かつ、大学公開講座のように、トインビーホール門の「外側から内側へ」人々を招き入れる活動ではなく、トインビーホールの「内側から外側へ」生活改善を必要とする人々を訪ね、活動にいざなう運動であった。その「内側から外側へ」働きかける活動は、学区、学校理事制度を利用した体系的な活動であり、高貴な人々の協力を得たり、王族や貴族の年次会議への参加や下院の寄付を受けたりするなど、広く認知されている活動でもあった。また、トインビーホール設立によりその規模は大幅に拡大され、バーネットの子供に関する問題意識を解決するひとつの糸口として、具体的活動へと結実したものであった。

ただし、バーネットは晩年、基金の活動の経験を踏まえ小学校の夏季休業中に郊外での学習課程を設置すべきとの提言を行っているものの、法整備に影響するまでには至らない。それを踏まえて考えると、「子供の田舎休暇基金」は、子供の福祉増進のための博愛的慈善活動の域を越えず、社会改良運動の流れの中では、「子供の田舎休暇基金」が社会問題の根本的な解決に積極的貢献をしたとは言いがたい。しかし、これは従来注目されてきた、「外側から内側へ」貧しい人びとがトインビーホールを訪れ行われてきた活動とは異なり、貧困の実態とニーズを積極的に把握したうえでの画期的な活動ではあったということができると考える。

6. 終わりに

従来の研究では、トインビーホールというイギリス初の「セツルメント」への言及、また、「大学セツルメント」の文脈の中でトインビーホールの存在意義に注目がされてきた一方で、トインビーホールが行ってきた具体的事業や、それによってどのような役割を担ってきたのかまでは注目されてこなかった。しかし、今回「子供の田舎休暇基金」に注目することで、トインビーホールが従来注目されていた「外側から内側へ」貧しい人びとを招き入れる活動ではなく、「内側から外側へ」と、イーストエンドで起こっている問題に対して明確に問題意識を持ち、状況の改善に向けた積極的姿勢をとっていたことがわかった。

ただし、「子供の田舎休暇基金」のみへの注目、トインビーホールの積極的姿勢が全て明らかになるものではなく、基金により貧しい人びとの教養や意識の変化に影響があったということができても、実際に起こっていた貧困に関する問題について社会改良に貢献したと言

切れるものではない。しかし、バーネットの問題意識として挙げられる「住宅」について注目してみると、チャールズ・ブースの貧困調査にトインビーホールが大きく貢献していることや、オクタヴィア・ヒルらの住宅改良運動との関わりも浮かび上がってくる。このように、トインビーホールの具体的活動・事業への注目は、トインビーホールのイーストエンドへの影響にとどまらず、同時代の社会への貢献を明らかにする糸口となることが期待できる。このトインビーホールの新しい側面を取り上げることは、今後の課題とする。

最後に、拙稿ながら本論文の掲載の機会を与えてくださった國學院高校の先生方、査読にご協力くださった國學院大學大久保桂子教授に感謝する。

【脚注】

- i. 後掲の [写真] は、受講者たちが購入したチケットと開講講座の告知のポスターである。
 - ii. Betjeman, John "Victorian and Edwardian London from Old Photographs." London, 1969.
 - iii. 後掲の [地図] は、ブースによって作成された貧困地図の、ロンドンの北東部を表すシートである。
 - iv. "Lord Ripon At Toynbee-Hall." *Times* [London, England] 50ct. 1885: 7. *The Times Digital Archive*.
また、トインビーホールの位置は後掲の [地図2] を参照されたい。
 - v. 佐藤順子「トインビーホールの地域社会における今日的活動」『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要 (2)』pp107-115 2004
 - vi. M. E. Rose (Review) "Toynbee Hall and Social Reform 1880-1914. The Search for Community by Standish Meacham. *Social History*." Vol 14, No.2, 1989 p265.
 - vii. Barnett, Henrietta "*Canon Barnett—His Life, Work and Friend*." London. 1918. Vol1. pp320-321.
 - viii. タイムズ紙のデジタルアーカイブスを利用し、バーネットの最初に記事を寄稿した1879年からバーネット逝去の1913年までの112件の記事について、以下の言葉を含む記事を絞り込んで検索した結果、該当する記事の数は以下ようになった。タイムズ紙以外のメディアへの寄稿も見られる。しかし、継続的にタイムズ紙の「編集長への手紙」の欄に記事が掲載されていたこと、バーネットがトインビーホール設立以前という早い段階から寄稿を始めていたこと、また、妻ヘンリエッタが著した伝記内の著作・出版物の一覧においても同様の傾向がみられることから、今回はタイムズ紙への寄稿記事の分析によって得られた結果をバーネットの問題意識の指標として採用し、イーストエンドの貧困、中でも子供に関する問題に注目することとした。
- [分析結果] 子供 (Children) 58、貧困 (Poor, Poverty) 34、住宅 (House, Dwelling) 24、教育 (Education, School) 23、トインビーホール (Toynbee Hall) 11、チャリティ (Charity, ※不健全経営批判を含む) 15、芸術 (Art) 10、犯罪 (Crime) 10、教会 (Church, ※体制批判を含む) 8、道

- 徳 (Moral) 7、失業 (Unemployed, Unemployment) 7、寄付 (Donation, Subscription) 4、衛生 (Sanitary) 4
- ix. *'Entertainments &c.,'* *Times* [London, England] 4 July 1887: 1. *The Times Digital Archive*. Web. 21 July 2014.
'The Theft From Gray's Inn Library.' *Times* [London, England] 11 Nov. 1905: 6.
- x. *'Funerals on Economic Principles.-Jay's.'* *Times* [London, England] 4 July 1887:1
'Court Of Common Council.-A meeting of.' *Times* [London, England] 30 June 1894: 18.
- xi. F. Londin. *'Children's Country Holiday Fund.'* *Times* [London, England] 11 Aug. 1885: 12.
- xii. F. Londin. *'Country Holidays For London Children.'* *Times* [London, England] 25 July 1887: 8.
- xiii. Joseph R. DIGGLE. *'The Children's Country Holiday Fund.'* *Times* [London, England] 4 Sept. 1893: 10.
- xiv. *'Children's Country Holiday Fund.'* *Times* [London, England] 25 May 1897: 16.
- xv. *"Toynbee Record,"* Jan, 1890. pp44-46.
- xvi. Barnett A. Samuel, and Hamer, John. *'Children's Country Holiday Fund.'* *Times* [London, England] 6 Aug. 1896: 5.
- xvii. Barnett A. Samuel, and Hamer, John. *'Children's Country Holiday Fund.'* *Times* [London, England] 18 Apr. 1898: 4.
- xviii. Benham, William *'The Country Clergy Holiday Fund.'* *Times* [London, England] 25 May 1900: 4.
- xix. 【資料】を参照のこと。タイムズ紙、バーネットの妻ヘンリエッタによる伝記、トインビーレコード等に記載の数字を採用し、左から、実施年、前年の活動の参加者、ロンドンの小学生のうちの参加者の割合となっている。ロンドンの小学生のうちの割合に関しては、タイムズ紙で得られたロンドンの小学校に通っている全体の概数を採用し、参加人数をその概数で割った数字が示されており、1878年から1890年までは概数を60,000、1891年から1904年までは70,000、1905年から1912年までは80,000を記載してある。そして、表で示された参加人数と参加の割合の変遷がグラフで示されている。
- xx. Barnett, Henrietta, *Opcit.*, vol.1, p179.
- xxi. *Ibid.*, p183.
- xxii. Barnett, H. *op.cit.*, vol.1 p68
- xxiii. *"Toynbee Record,"* Jul-Sep.1899. pp134.
- xxiv. Heather-Bigg, Ada. *'A Harmful Charity.'* *Times* [London, England] 18 Aug. 1896: 9.

- xxv. Barnett A. Samuel. *"Country Air For Town Children."* *Times* [London, England] 10 Aug. 1881: 4.
- xxvi. Barnett Henrietta, *Opcit.*,vol.1 p190.
- xxvii. Barnett Henrietta, *Opcit.*,vol.1 pp182-190.
- xxviii. Barnett A. Samuel. *'Children's Country Holidays.'* *Times* [London, England] 11 July 1883: 6.
- xxix. Barnett A. Samuel, and JOHN HAMER. *'The Children's Country Holidays Fund.'* *Times* [London, England] 28 June 1887: 13.
- xxx. Barnett A. Samuel., and Hamer, John. *'Children In London.'* *Times* [London, England] 28 May 1900: 12.

[主要参考文献]

○一次史料

- Barnett Henrietta *"Canon Barnett- his life, work and friends"* J. Murray, London, 1918
- Booth Charles *"Life and Labour of the people in London"* Williams and Norgate, London,1889
- Forster William *"East London"* Pub. for the Historical Assn. by G. Bell, London, 1935
- Mayhew Henry, Bradley John *"Selections from London and the London Poor London"* Oxford University Press, London,1965
- Platt James *"Poverty"* Simpkin, Marshall, London, 1884
- Toynbee Arnold *"Progress and poverty: a criticism of Mr. Henry George"* K. Paul, Trench & Co., 1883
- 'Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England Popular Addresses, Notes, and Other fragments'* Longmans, Green, and Co., 1913
- Townshend Emily Caroline *"The case against the Charity Organization Society"* The Fabian Society, 1911
- Wohl Anthony *"The Bitter Cry of Outcast London"* Leicester University Press 1970.

○トインビーホール発刊資料

- "Toynbee Record"* 1885-1913, Toynbee Hall Archives.
- "Toynbee Hall Annual Report"* 1885-1913, Toynbee Hall Archives.
- "Toynbee Hall General Information"* The London Metropolitan Archives. 1906.
- "Toynbee Hall Financial Report"* 1888-1915. The London Metropolitan Archives.

[刊行史料]

- "The Bitter Cry of Outcast London -An Inquiry into The Condition of The abject Poor."* London, James and Clarke & CO., 13, Fleet Street, E.C. 1888
- "Bibliography of college, Social, University and Church Settlements."* Chicago, The College Settlements Association. 1900

[先行研究]

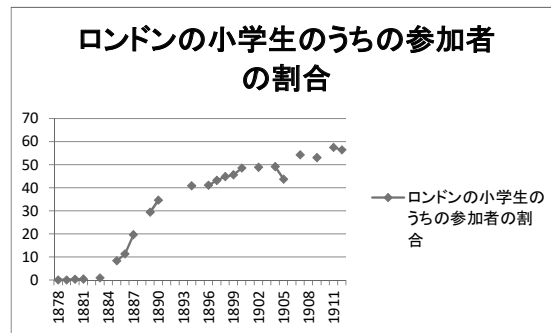
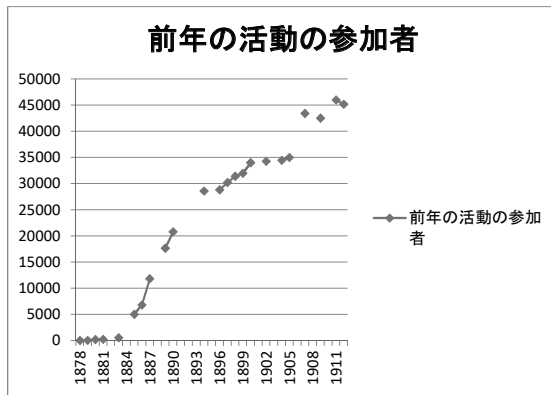
- Abel Emily K. *"Canon Barnett and the first thirty years of Toynbee Hall"*

- Beier A.L. "Identity, Language, and Resistance in the Making of the Victorian "Criminal Class":
Mayhew's Convict Revisited"
- Briggs Asa, Macartney Anne "Toynbee Hall: the First Hundred Years" Routledge & Kagan Paul,
London, Boston, Melbourne and Henley, 1984
(訳 アサ・ブリッグス, アン・マカートニー 阿部志郎監訳『トインビー・ホールの100年』全国社会
福祉協議会 1987)
- Hobbs Dick 'A Piece of Business: The Moral Economy of Detective Work in the East-End of London'
"The British Journal of Sociology" Vol. 42, No. 4, 1991. pp. 597-608
- Joyce, Simon 'Castle in the Air: The people's Palace, Cultural Reformism, and the East End Working
Class,' "Victorian Studies" Vol. 39, No. 4, 1996.
- Kadish Alon "Apostle Arnold: The Life and Death of Arnold Toynbee, 1852 - 1883" Duke University
Press, 1986
- Mcbriar A.M. "An Edwardian Mixed Doubles.: The Bosanquets versus The Webbs: A Study in
British Social Policy. 1890-1929" Clarendon Press, 1987
- Meacham Standish "Toynbee Hall and Social Reform, 1880-1914; The Search for Community" Yale
University Press, 1987
Review : 'An Edwardian Mixed Doubles.: The Bosanquets Versus The Webbs: A Study in British
Social Policy. 1890-1929'
- Moore M. J. (Review) 'Toynbee Hall and Social Reform 1880-1914. The Search for Community by
Standish Meacham.' "Victorian Studies," Vol. 32, No.2, 1989
- Oddy D. J. (Review) 'Toynbee Hall: The First Hundred Years, By Asa Briggs; Anne Macartney,'
"The Economic History Review, New Series," Vol. 38, No3, 1985
- Pimlott J. "Toynbee Hall: Fifty Years of social progress, 1884-1934" J. M. Dent and sons ltd., 1935
- Rose Michel E (Review) 'Toynbee Hall and Social Reform 1880-1914. The Search for Community by
Standish Meacham.' "Social History," Vol 14, No.2, 1989
- ゲーガン・ルーク, 青柳明訳 (講演) 「トインビーホールとセツルメント運動」 関東学院大学人間環境
研究所所報 2, 46-55, 2004
- 安保則夫 「イギリスにおける貧困認識の旋回—『ロンドンに見捨てられた人々の悲痛な叫び』をめぐ
って—」 『経済学論究』 41[2] 関西学院大学 1987
- 金沢周作 『チャリティとイギリス近代』 京都大学学術出版会 2008
「イギリスフィランソロピーの帝国の歴史」 『大原社会問題研究所雑誌(626)』 大原社会問題研究所
2010
- 佐藤順子 「トインビー・ホールの地域社会における今日的活動」 『聖隷クリストファー大学社会福祉学
部紀要 (2)』 pp107-115 2004
- 高島進 『アーノルド・トインビー』 大空社 1998
- 高田実 「「福祉の複合体」の国際比較史」 高田実、中野智世編 『近代ヨーロッパの探求15福祉』 ミネ
ルヴァ書房2012
「ゆりかごから墓場まで—イギリスの福祉社会—一八七〇〜一九四二年」 同書
書評 『チャリティとイギリス近代』 社会経済学75(6)pp664-666 社会経済史学会 2010
「フィランソロピー研究の成果と課題」 『大原社会問題研究所雑誌(628)』 2011
- 西山志保訳 「キャノン・バーネット『理想都市』 (Canon Barnett, THE IDEALCITY)」 慶應義塾大学
大学院社会学研究科紀要 (61), 2005.
- 長谷川貴彦 「近世化の中のコモンウェルス—イギリス福祉国家の源流をもとめて」 高田実、中野智世
編 『近代ヨーロッパの探求15福祉』 ミネルヴァ書房2012
- 宮本洋子 「大学セツルメント「トインビー・ホール」命名の意味に関する一考察：トインビー講義の
開催と記念館設立をめぐって」 『人間形成と文化3』 奈良女子大学 1999

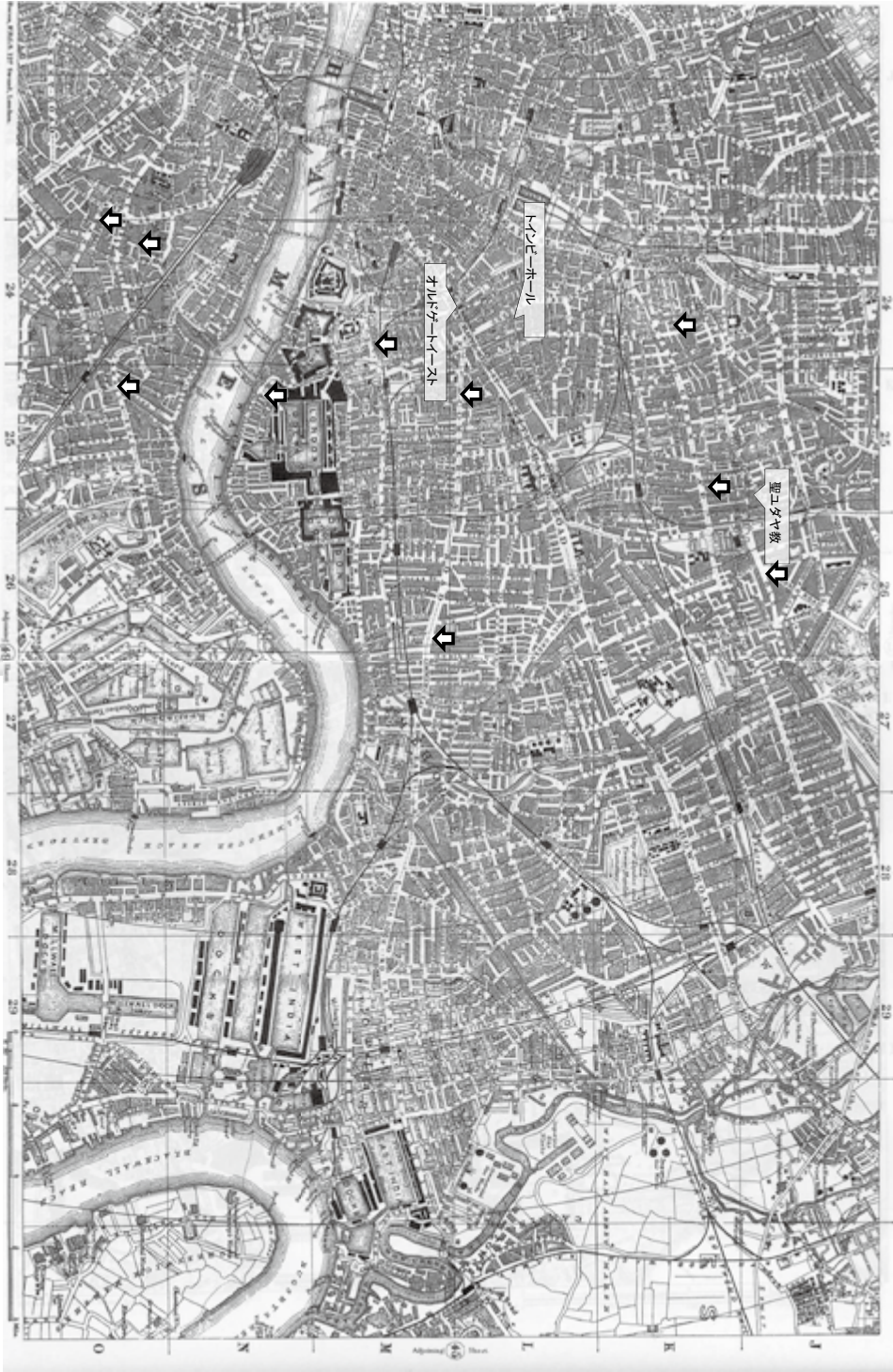
「ベイリオル・コレッジ：トインビー・ホール設立の歴史的背景に関する一考察」『奈良女子大学教育学科年報12』奈良女子大学 1995
山口信治「英国における大学セツルメント運動の立役者，チャノン・バーネット」社会学部論集39 佛教大学 2004

[資料] 子供の田舎休暇基金参加人数

実施年	前年の活動の参加者	ロンドンの小学生のうちの参加者の割合
1878	9	0.015
1879	33	0.055
1880	170	0.283333333
1881	228	0.38
1882		
1883	537	0.895
1884		
1885	5006	8.343333333
1886	6800	11.333333333
1887	11800	19.666666667
1888		
1889	17637	29.395
1890	20772	34.62
1891		
1892		
1893		
1894	28589	40.84142857
1895		
1896	28783	41.11857143
1897	30224	43.17714286
1898	31412	44.87428571
1899	31970	45.67142857
1900	34000	48.57142857
1901		
1902	34259	48.94142857
1903		
1904	34434	49.19142857
1905	35000	43.75
1906		
1907	43442	54.3025
1908		
1909	42510	53.1375
1910		
1911	46000	57.5
1912	45174	56.4675



- ・タイムズ紙、バーネットの妻ヘンリエッタによる伝記、トインビーレコード等に記載の数字を採用した。
- ・左から、実施年、前年の活動の参加者、ロンドンの小学生のうちの参加者の割合となっている。
- ・ロンドンの小学生のうちの割合に関しては、タイムズ紙で得られたロンドンの小学校に通っている全体の概数を採用し、参加人数をその概数で割った数字を示した。小学生の概数は、1878年から1890年までは概数を60,000、1891年から1904年までは70,000、1905年から1912年までは80,000とした。
- ・表で示された参加人数と参加の割合の変遷がグラフで示されている。



・白い下向き矢印は、同時代に設立されたセウルメントの施設の位置を表す。

[地図1] イーストエンドの地図